SUSTAINABLE WEEK

SUSTAINABLE WEEK SUPPORTS SDGs.

The SDGs Pioneer Booklet Vol.2

もくじ

これまでにつながった SDGs ネットワーク

P2　The SDGs Pioneer Booklet vol.2 作成にあたって

P3　AIOL（All In One Laboratory）| 管理人　金山 秀幸 氏

P4　スポーツ健康科学部｜教授　岡本 直輝 氏

P5　食マネジメント学部｜准教授　小沢 道紀 氏

P6　食マネジメント学部｜准教授　野中 朋美 氏

P7　共通教育推進機構｜講師　宮下 聖史 氏

P8　生命科学部　｜教授　山中 司 氏

P9　BKC 地域連携課

P10　BKC 学生オフィス

P11　映像学部　3 回生｜Entervibe 代表　小川 玲香 氏

P12　理工学部　3 回生｜COMARS 代表　岸本 俊輝 氏

P13　経済学部 2 回生｜meRci 代表　佐藤 仙一郎 氏

P14　生命科学部　3 回生｜TaBiwa+R 代表　中西 優奈 氏

P15　公益財団法人 京都市環境保全活動推進協会｜校友　渡邊 里々子 氏

P16-17　取材後記

The SDGs Pioneer Booklet vol.2 作成にあたって

SDGsが国連で採択されてから5年が経ちました。最近ではスーツにSDGsバッジをつけた会社員の方がめっきり増えてきました。小中高の社会の教科書でもSDGsについて取り上げられています。もはやSDGsは知っていて当たり前のような社会になってきました。さて、私たち立命館大学Sustainable Week実行委員会も2017年に設立してから4年目に入りました。2019年度は共感と発信を意識しつつ、過去2年間で築いてきたネットワークも活かしながらSDGs体験型イベント「Sustainable Week」にとどまらず数多くの様々な企画を実施しました。実施するにあたっては、立命館の教職員の方をはじめ自治体や企業様より多大なご協力をいただきました。特に私たちを一番身近で支えてくださる立命館の教職員の方々の理解なしには成し遂げられないことが多々ありました。

当ブックレットでは立命館大学Sustainable Week 実行委員会が活動を進めるにあたって連携してきた学生団体、教職員の方に実行委員会のメンバーが取材を行い、それぞれの取り組みをまとめています。これは日頃の感謝だけでなく、教職員の方や卒業生がどのような思いで、何を目指しているのかを伝えるとともに、メンバーでも共有しあうためでもあります。また当ブックレットを発刊することにより、立命館学園内のSDGsの取り組みを発信するだけにとどまらず、学園を構成する一人一人がSDGsへの意識を持ちながら活動することを期待しております。

立命館大学 スポーツ健康科学部 3回生　亀石 弥都

Sustainable Development Goals とは

国連は2015年9月、誰1人取り残さない「持続可能な開発目標（SDGs）」を掲げました。SDGsのカバーする範囲は先進国も巻き込んだ世界中に広がっており、全世界で取り組むべき課題となっています。その流れにのり、大学の世界ランキングの評価項目にSDGsが2019年から追加されたりと、教育機関でもSDGsを推進していく動きがみられます。近年、日本でもSDGsへの取り組みは急激に加速化してきています。達成期限である2030年を目指し、世界が一致団結して取り組んでいく基盤が日本でも出来上がりつつあります。

▲ 国連が制定した SDGs のロゴデザイン

ものづくりをもっと自由に
夢を実現するきっかけはAIOLから

理工学部機械工学科・AIOL管理人
金山 英幸 氏

AIOL ではものづくり支援スペースとして学生の成長を促し、学生の作りたいという気持ちをサポートするために学生スタッフがアドバイザーとして勤務している。また学生同士のピアラーニングを行っている。

AIOL(アイオーラボ:All In One Laboratory)は立命館大学のものづくり人材育成に関わる取り組み拠点である。ここでは、機械工作や電子工作に必要となる各種工作機器、工具、部材、測定機器やCADシステムなどが整備されている。学生、大学院生および教職員はこれらの設備や部材を基本的に無償で利用できるようになっている。AIOLにはコンセプトの具現化、設計、試作などに対して指南できる指導員が複数常駐しており、実践を通して理解を深めることができる場所でもある。

また、次世代のものづくり人材の育成、小中高生へのものづくりへの関心喚起、先端技術によるものづくりの一般化という、3つの目標を掲げ、研究活動や趣味などでの利用だけでなく、正課授業や学生講師によるピアラーニング講座なども開催している。

これからの展望について、AIOL管理人である金山英幸氏は「AIOLが立命館大学びわこ・くさつキャンパスの顔になれるようにさらに利用者を増やしていきたい。立命館の学生だけでなく、来た人にとって何かが生まれる場所であり続けるとともに、長期休暇中には小学生向けの体験会を実施し、子どもたちのやりたいことや夢の実現に向けてきっかけを与え将来の可能性を広げたい」と話していた。

(取材:亀石 弥都)

社会に求められる人になる「基礎演習」

立命館大学 スポーツ健康科学部
教授 岡本 直輝 氏

専門の学びに役立つ基礎的な理論や学びの手法を身につける一年次の必修科目「基礎演習」。スポーツ健康科学部では、今年度の秋学期から「小集団演習科目 基礎演習Ⅱ」にて、学生が実践的にSDGsに取り組めるカリキュラムへの改革が始まった。

スポーツ健康科学部の基礎演習Ⅱにおいては前年度まで、学部での学習の集大成である卒業論文の作成に向けて、研究法ついて学ぶことを目標に1回生からゼミナール大会を実施していた。しかし、専門の知識が浅い1回生の段階では、研究の本質を理解することが難しいという課題があった。そこで、小集団の学習を活かして、社会のSDGsに向けた取り組みを観察し、学生自らが考え、アクションを起こす授業への改革を今年度から始めた。教室内の学びでは、様々なSDGs活動や課題意識から積極的に活動をしている実践者による講演、教室の外では、学生が考えた企画が実施された。今後も今回の授業で生まれたプロジェクトが発展し、課外（サークルや団体）での活動となり持続していくことが期待されている。

そして、来年度には年間を通じてSDGsに取り組めるカリキュラムの実現に向けて、アカデミックアドバイザーを担っている学生や担当教員らと計画を進めている。基礎演習の主幹担当である岡本直輝氏は「SDGsの達成のためには、世界中のみんなが手を取り合えるような取り組みが必要。これからは、学校・学ぶ場所である「立命館」から、地域・社会、そして世界から「何かしたいなら立命館」と認識され、立命館をハブに次々と世界を巻き込んだアクションが生まれることを目指している。そのために、新しいことに積極的にチャレンジできる環境を大学での学びから作っていきたい」と力を込めた。

（取材：中西 優奈）

日本の将来は明るいのか？
それを実現させる社会にするには

立命館大学 食マネジメント学部
准教授 小沢 道紀 氏

「日本の将来は本当に明るいのか」という研究に興味をもち、学生団体やサークルの顧問を引き受けるといった学生の挑戦を応援する環境づくりをしながら、明るい未来を実現するためのアプローチの仕方を模索しながら活動している。

小沢道紀氏は今、多様な問題がある中で、学生が活躍するための社会をつくる必要があると考えている。また、学生がただ活動するのではなく、過疎化が進んでいる地方で活動すべきではないのかとも考えている。実際になぜ学生が活躍していく必要があるのかと尋ねたところ「今の大学生は自分でなにかに挑戦し、その結果から学ぶ機会が減っていたり、自分がなにか小さなアクションを起こすことで少しでも社会に貢献しているという実感を得る機会が少ないのではないか」と話した。そのことから、学生が挑戦したいと少しでも考えているのなら、それを応援できるような環境を作り、実際に学生をサポート出来る体制を整えている。

例えば、企業や行政の方、地域の方と学生を繋げたり、学生団体やサークルの顧問を引き受けたりしている。また、食マネジメント学部創設時も学びと実践を軸として、活動したい学生が自由に活動できるような仕組みを作ったという。

今後について小沢道紀氏は「自分が持っているステークホルダーや考えを学生に教えていき、中山間地域と言われている地方を良い方向に変えることで、社会を変化させていきたい。そして社会が変化するとともに自分の活動も変えていき、新しいことに挑戦し続けたい」とも語った。

（取材：田中 直人）

食からサステナビリティを考える

立命館大学 食マネジメント学部
准教授 野中 朋美 氏

食からサステナビリティを考えることで、「食」を単なる食材や食べ物として捉えるのではなく、地域性や時代性など時間・空間軸を考慮しながら食に関わる全体をシステムとして捉え、持続可能な食・食サービスシステムデザインを日々研究している。

野中朋美氏は、食の満足が多様化している現代において「食・食サービスのサステナビリティ」を研究テーマの一つとして活動している。食は同じ人が同じものを食べたとしても、その時の体調や環境によって感じるおいしさは異なる可能性がある。また、人の考え方や価値観は地域性があり日々変化していくため、時間軸(temporal)と空間軸(spatial)から持続可能性を考える必要がある。これまで研究されてきた製造業(ものづくり)の知見に、無形性・消滅性・同時性といった特徴を有する食・食サービスの研究を交えることによって持続可能性を新たな視点から複合的に捉え環境、経済、社会の課題を解決していく。過去から今までの事象を習いながら未来の持続可能性を研究する大きな可能性を「食」には見出すことできると考えている。食を通じた多視点からの多様な評価により、今までとは違った視点や評価軸・手法を発見していくことを目指している。

今後も引き続き、持続可能な食システムデザインを研究していくために、鎌谷かおる氏と共同でEdoMirai Food System Design Labでの活動を進めている。また、お菓子OEMメーカーとの共同研究では、社会課題解決のためのゼリー(Multi-purpose Jelly Food)を研究開発している。「将来どのような未来に向かうことを目指して、社会システムをデザインしていくのか、食を起点に持続可能な未来社会を提案していきたい」と野中朋美氏は語った。

(取材:岸本 俊輝)

地域と学生の出会いの場を提供する

立命館大学 共通教育推進機構
講師 宮下 聖史 氏

地域社会が抱える課題について研究を行いながら、サービスラーニングという学びの手法を用いることで、座学に加え、実践を通した学びの場を提供する授業を行っている。

宮下聖史氏は、自身の研究分野である地域社会学をベースとした授業を行っており、授業の一環として地域でのボランティア活動も行っている。その際は、活動をするだけで終わるのではなく、座学と実践の両方が大切であるという視点から、学生に活動の社会的意味を考えてもらい、学びを深めるとに繋げている。受講をきっかけとして、社会への関心を持ってもらえる授業を展開するように意識しているそうだ。そのようななか、学生に対して、大学での学習機会を自覚的な学びとして受け止めてもらうことが課題になっているという。

宮下聖史氏は「学生に興味を持ってもらえそうないろいろな話題を取り上げ、問題意識をもってもらうことで成長していくことができるような授業を目指している。学生の自覚を促すような授業を行うように試行錯誤していくとともに、自身としてもさらに新たなフィールドで活動の幅を広げ、自分自身が地域の関係人口となり活動していきたい」と話していた。

（取材：松村 有真）

マイプロジェクトを立てて SDGsを「自分ごと」にする

立命館大学 生命科学部
教授 山中 司 氏

SDGs をツールとして、自分の本当にやりたいこと・好きなことについて活動する大切さを伝えながら、「SDGs 表現論」という授業などでそのような機会を与えたり、大学生の思いを後押しできるような教育を目指している。

山中司氏は、近年SDGsに関する活動が増える中で、SDGsありきではなく、まず自分が本当にやりたいこと・好きなことについて活動することを重視するよう学生たちに伝えている。その上で、自分たちの興味・関心は必ずどこかでSDGsの17の目標につながっていると考え、若者のさまざまなマイプロジェクトを支援している。また「SDGs表現論」という授業を通して、マイプロジェクトとSDGsをつなげる手助けができるような教育も行っている。国連の目標であり、一見私達には関係ないように見えるSDGsをいかに「自分ごと」にできるかを軸にして、若者の思いや問題意識、純粋な疑問を摘み取らず、本来の思いを尊重した教育を大切に活動している。

また将来の展望として、現在衣笠キャンパスで行っている「SDGs表現論」を2020年度は3キャンパス全てで行う。多くの学生に自分の興味・関心と向き合う機会をもってもらうことで、「大学らしい広がりを期待している」という山中司氏。また、立命館大学の学園ビジョンR2030にある「挑戦をもっと自由に」というスローガンにも関連して「大学は失敗してもいいところであり、その大学でしかできないことを学生が主体的にやっていこうというメッセージを伝え、それを教育として展開できるように活動していきたい」と語っていた。

（取材：荒木 真凜）

地域との信頼関係をつくる
この地にあって良かったと思えるキャンパスを

立命館大学 BKC 地域連携課

BKC 地域連携課は学生がより快適に学生生活を送るためのキャンパス管理や立命館大学と行政、地域との関係を繋ぐ窓口を担っており、大学が持つ教育・研究や地域との交流も目的とした学生団体の活動の支援も行っている。

BKC地域連携課は学生が安心・安全・快適に学生生活を送れるようにキャンパス内施設の空調や警備、清掃など、キャンパスの管理を行っている。それだけでなく「開かれたキャンパス」という立命館大学を「地域との交流が盛んなキャンパス」にするために、学生の取り組みのサポートも行っている。具体的には地域からも応援される部活動を目指して、ラクロス部や陸上部の学生が地元の祭りや川の清掃を行ったり、男子バスケ部、アメフト部が「登校時の子供の安全を守る」ことを目的とした交通安全の取り組みなどを行っている。また、学生が主体となって地域と交流を持てるように地域と学生とを繋ぐ窓口を担っている。

「地域との関係を大切にし、地域と学生が交わることでキャンパスの中でしかできないこと、立命館大学だからこそできる取り組みを継続していきたい」と井上拓也課長は話す。そして人々のキャンパスに対するイメージを変えたいともいう。「大学もさらに開かれたものにするため、キャンパスは学生にとっての学びの場だけではなく、高齢者、小学生や親子にとっても学びの場へ。そして『この地にBKCがあって良かった』と思ってもらいたい」。教職員同士力を合わせて、さらにより良いキャンパス作りを目指していく。

（取材：徳田 祥吾）

学生の自由な挑戦を支援する

BKC 学生オフィス

助成金支援や施設・備品の調整を行うなど、学生の活動を支援することで、大学の役割である人づくりを行なっている。

BKC学生オフィスでは、学生の課外自主活動での挑戦や成長を支援している。そこでは奨学金や助成金、施設・備品貸与、各部署・関係者との調整など、学生の日々の困りごとに関する相談を受け付ける。また、施設や奨学金・助成金等の限られた資源を多くの学生間でより有意義に活用していくため、各種学内ルールを踏まえて互いに尊重しあいながら課外自主活動に取り組んでもらうようにしている。

今後についてBKC学生オフィスの本田容子氏は「これまで通り学生の自由な挑戦を支援するべく、学生自身がどうしたいか、何をやりたいのかということに対して学内のさまざまなルールなどを踏まえた上で、できる限りの支援をしていく」と話す。また様々な活動に挑戦する学生に対しては「大変なこともたくさんあると思うが、自分の思いを貫き、失敗を重ねつつ学んで成長していってほしい。そしてその経験を生かして社会で活躍する人材になってもらいたい。そうすれば、学生オフィスとしても支援を行っていく意味があるといえる」とエールを送る。

（取材：豊田 真彩）

多種多様な人々が感動を共有することで互いを受け入れ尊重し合う

立命館大学 映像学部 3回生
Entervibe 代表　小川 玲香 氏

「多種多様な人々が感動を共有することで互いを受け入れ尊重し合う」をモットーとする団体 Entervibe。今年度は NPO 法人ケ・セラとコラボしたり、展示会を行ったりと人と人とのつながりを広げている。

小川玲香氏は留学で差別や偏見について改めて考え、相手を思いやるきっかけを作りたいと思い「多種多様な人々が感動を共有することで互いを受け入れ尊重し合う」をモットーとする団体、Entervibeを約1年前に立ち上げた。その根本には楽しませた方も楽しんだ方もお互いが笑顔になる空間を作ることで、互いの理解を深めるきっかけを築き、社会を良いものにしていきたいという考えがある。

Entervibeでの活動としては、具体的な活動としては、障がい者自らが音楽活動を行い、地域で自立生活できる社会の実現を図るNPO法人ケ・セラとコラボし、観客の動きに合わせて映像演出が変わるインタラクティブ演奏会の実施や、人と繋がることによって世界が広がるというコンセプトを持つLINDAホステルでの地域の人々とアートで繋がる展示会などを行ってきた。また、小川氏は国際協力に関しても関心があり、物資の支援など一方的な物ではなくエンタテインメントを届けることでお互いが笑顔になるような取り組みを検討している。先進国同士で先進国ならではの悩みを、笑顔を増やすことで解決するという自身の考えから、国を超えてエンタテインメントで繋がる企画を現在進めている。

今後は、自分たちがいろんな人を繋げると同時に広がった、自分たちの繋がりを活かして新たな企画を作っていくことを目指している。

（取材：石原 来美）

日常には欠かせない
移動をもっと自由に、たのしく

立命館大学 理工学部 3回生
COMARS 代表　岸本 俊輝 氏

人々の潜在的な課題意識に着目し、技術者が新しいテクノロジーを自己満足で生み出して終わるだけでなく社会に実装していくことで、人々のニーズに応えることができるサービスを提案している。

立命館大学COMARSは、自転車を通じた「移動」という日常には欠かせない行動に着目したモビリティサービスを提案している。例えば大学では、駐輪場に不便を感じている学生が多いことから、駐輪場の空き具合を可視化するシステムの構築を目指している。さらに、テクノロジーを利用する人々を意識し、ワークショップを開催することによって、構築したシステムのニーズがあるかどうかを確認すると同時に、イメージを共有する取り組みを行っている。これらの取り組みを通して、安心してモビリティを利用できる社会の実現と地域社会の移動・交通の課題を解決できるサービスを届けることを目指している。

今後の活動について代表の岸本俊輝氏は立命館大学だけでなく、大津市などの社会実装できる行政からの協力を得ていくとともに、龍谷大学などの他大学への水平展開も目指していきたい。そして「地元における潜在課題の共通性に着目していき、さらなる展開を目指す。これまでの『移動』の考え方の視点を変化させ、新しい視点で問題を解決できるようなアイデアやシステムを提案していきたい」とも語った。

（取材：多田 圭吾）

料理サークルmeRci
地域に食の美味しさやつながりを

立命館大学 経済学部 2回生
meRci 代表 佐藤 仙一郎 氏

学園祭では毎年引っ張りだこの料理サークル meRci。おいしい料理を作るだけでなく、いろんなところに還元したいとの思いで、地域の催し物などにも多数出店している。今年度は8月に期間限定で地元野菜・地域のオープンスペースを活用したカフェを開店した。

カフェ開催のきっかけは、団体のツイッターアカウントに届いたダイレクトメッセージ。滋賀県大津市にオープンスペースを有する敷島住宅㈱からスペース活用の提案をうけ、半年弱で実現に至った。5～6月はJAに通い、地元野菜を一番活かすことができるパスタをメニューとして確定した。開店した5日間で300人を超える人が来店した。若者・ファミリー向けに作ったパスタは、高齢のお客さんには不評だったりと大学を超えた活動だからこその発見もあったという。

しかし、アンケートのクレームは日数を重ねる毎に減っていき、最終日にはクレームゼロを達成することができた。たくさんの「縁」で実現できたカフェは、終了後も地域住民・JA・オープンスペースをつなぐきっかけとなっている。

カフェでたくさんの人に料理を提供する機会は、地域住民への知名度を高め、サークルメンバーの責任感を強くした。「来年度は学生の間で知名度をあげ『サークルといえばmeRci』と名前が挙がるようになってほしい。料理学校には料理の技術では勝てないかもしれないが、地域や各所との連携といった自分たちならではの強みを育て、いつまでも長続きするサークルにしていきたい」と代表を務める佐藤仙一郎氏は期待を込めて語った。

（取材：西野 日菜）

地域活性化を目指して、初めて出向いた甲賀市での体験から得たこと

立命館大学 生命科学部 3 回生
TaBiwa+R 代表　中西 優奈 氏

2018 年度に甲賀市を舞台に「SDGs 地域共創型プログラムむらのこ」を実行したことを皮切りに、今年度、自身が代表を務める TaBiwa+R でガバメントクラウドファンディングを用いて集めた資金で「ふるさと SDGs：甲賀でつながる 30 日」を実施した。

「草刈りの当番が上手く回っていない」「害獣対策の柵を管理する人がいない」TaBiwa+R代表の中西優奈氏は地域活性化を目指して地域の皆様と交流する中で、度々このような声を地域の方からいただくことがあった。草刈りや柵を管理することが地域活性化に繋がるのか、中西氏は疑問に感じていた。この経験から人手の力として甲賀市に行くのではなく、甲賀市をモデルとして色んな地域が活性化するためにはどうしたら良いかを考えることが第一に必要であると考えた。それが「SDGs地域共創型プロジェクト -甲賀でつながる30日-」である。

学生や若者に自分自身の視点で甲賀市のような地域を見て、自分ごととして捉えてもらえるような取り組みとして、11月の1ヶ月間甲賀市の空き家を生活拠点としながら、毎日企画を行った。しかし、今回は学生が学校に通っている時期の企画であったため、地域住民と関わる機会が少なかったことが反省だという。中西氏はそうした課題を踏まえ「幅広い年齢の方の意見を取り入れ地域を活性化させるという目標を達成するために、次は夏休みなどの若者が自由に動ける長期休暇に企画を行いたい。また、協力して下さっている方々への感謝の気持ちを忘れず、甲賀市の地域活性化はもちろんのこと、甲賀市という場所を切り口としてその他の地域へと活動領域を増やしていきたい」と語った。

（取材：徳田 祥吾）

Sustainable Weekでの活動について そこから発展した自分の将来

京都市環境保全活動推進協会
校友 渡邊 里々子 氏

Sustainable Week の立ち上げに関わり、大学卒業後、現在は京エコロジーセンターの職員として若者の「やりたいこと」を支援する企画・運営を行っている。また、同時に自身の「やりたいこと」であるデザインの学習も行っている。

渡邊里々子氏は3回生の時「大きな環境イベントを開催したい」という思いから、上田隼也氏と学科の先輩であった馬場亮輔氏とともに立命館大学 Sustainable Week 実行委員会を立ち上げた。Sustainable Week 2017では、大学1回生の時から所属していたサークルで「0円食堂」を開催した。この企画では売れ残りの野菜と古米を使った0円カレーを提供し、そこから人々が環境問題に目を向けるように促すことを目指した。そんな渡邊氏がデザインを手掛けるようになったのは、イベント終了後に開催報告書を作成する際にイラストレーターを本格的に使い出したことがきっかけだった。

最初はやらざるを得ない状況で仕方なくやっていたそうだが、いつの間にかデザインをすることが自分の趣味、やりたいことに変化してデザインの仕事を積極的に行うようになった。そして大学卒業後、京エコロジーセンターに就職し、SDGsを達成するための実践型プログラムの企画立案をはじめ、チラシや広告のデザインの仕事も継続している。

「多くの人に自分がデザインしたモノを見てもらい環境問題にもっと目を向けてもらいたい」。渡邊氏は自身の興味と趣味を掛け合わせ、これからも人々の環境問題への意識向上を目指しているようだ。

（取材：中西 愛裕美）

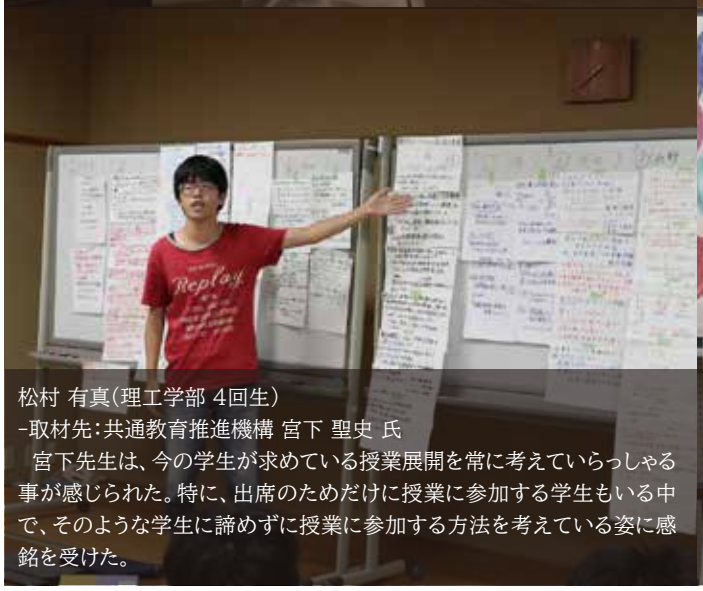
The SDGs Pioneer Booklet vol.2 取材後記

亀石 弥都(スポーツ健康科学部 3回生)
-取材先:AIOL 金山 英幸 氏
AIOLでは来室した人の夢や可能性を伸ばすだけでなく、学生スタッフの可能性も広げるような仕組みを作っていることがわかった。設備も充実しているので、自分と繋がりのある周辺地域の子どもたちや親御さんにも紹介したいと思った。

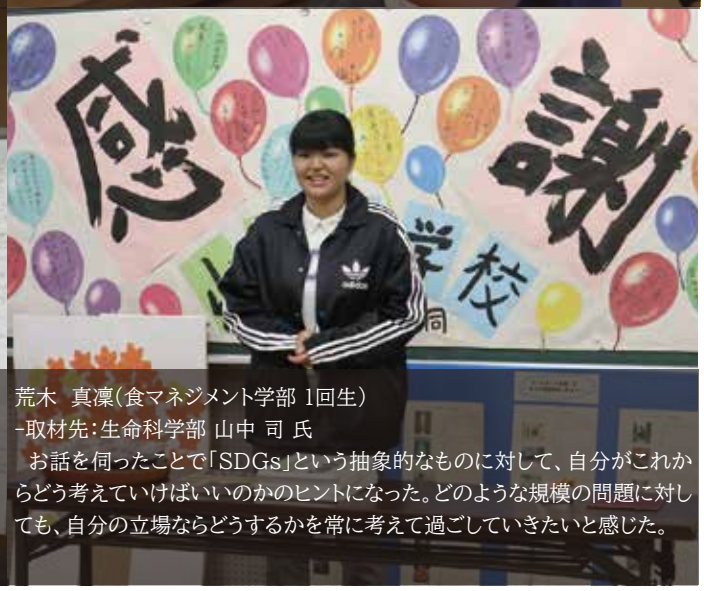
中西 優奈(生命科学部 3回生)
-取材先:スポーツ健康科学部 岡本 直輝 氏
取材を通して、学生がみんなでSDGsに取り組むことができるのが授業で取り組む強みであると感じた。SDGsをキーワードに学部を超えたアクションが生まれる環境になってほしい。

田中 直人(理工学部 2回生)
-取材先:食マネジメント学部 小沢 道紀 氏
今回の取材において思ったことは小沢先生が非常に学生思いで学生が活躍していけるような環境づくりに力を入れているということである。また、地域の方とのコミュニティがあり、交流も頻繁にされているとのことで、繋がりを大事にしている先生だと思った。

岸本 俊輝(理工学部学部 3回生)
-取材先:食マネジメント学部 野中 朋美 氏
野中先生の多視点で物事をみる大切さを知って、今後必要となる力は何か考えるきっかけができた。ただ専門性を持つだけでなく、他の分野にあえて興味を持つことで今後も活動していきたいと思った。



松村 有真(理工学部 4回生)
-取材先:共通教育推進機構 宮下 聖史 氏
宮下先生は、今の学生が求めている授業展開を常に考えていらっしゃる事が感じられた。特に、出席のためだけに授業に参加する学生もいる中で、そのような学生に諦めずに授業に参加する方法を考えている姿に感銘を受けた。



荒木 真凜(食マネジメント学部 1回生)
-取材先:生命科学部 山中 司 氏
お話を伺ったことで「SDGs」という抽象的なものに対して、自分がこれからどう考えていけばいいのかのヒントになった。どのような規模の問題に対しても、自分の立場ならどうするかを常に考えて過ごしていきたいと感じた。

The SDGs Pioneer Booklet vol.2 取材後記

徳田 祥吾(理工学部 2回生)
-取材先:BKC地域連携課/TaBiwa+R 中西 優奈氏
地域連携課はキャンパス内の管理を行い、学生が地域の方々と繋がるきっかけを作っていることを知った。中西さんは地方創生のために実際に地域へ行き、プログラムを行っていたことを知った。今ある環境に感謝し、アクションを起こすことが大切だと感じた。

豊田 真彩(食マネジメント学部 1回生)
-取材先:BKC学生オフィス
BKC学生オフィスでは、学生が課外自主活動を行う上で幅広く支援をしていることがわかった。学生の自由な挑戦を応援してもらえる環境が整っていることを、自分の周りで何かに挑戦したいという思いを持った人に伝えたいと思った。

石原 来美(食マネジメント学部 2回生)
-取材先:Entervibe 小川 玲香 氏
小川玲香さんの、エンタテインメントを届けることでお互いが笑顔になる、笑顔を増やすことで解決するという考え方に惚れ惚れした。現在進めている国際協力のイベントも、多くの人に笑顔と感動を与えて問題解決に繋がるだろう。今後の活躍を応援したい。

多田 圭吾(映像学部 1回生)
-取材先:COMARS 岸本 俊輝 氏
これからの日常生活で「移動」に対する自分の意識を変えて、考えてみようと思った。無意識のうちに感じられる課題が、他の分野においてもあると感じ、モビリティという分野だけでなく他の方面へも意識していきたい。

西野 日菜(理工学部 3回生)
-取材先:meRci 佐藤 仙一郎 氏
meRciが提供する美味しい料理の裏側には、地域との信頼関係や地道なサークル活動があることを取材を通して知った。夏のカフェを通じて得た人脈や経験がmeRciの更なる発展に繋がっていると感じられた。

中西 愛裕美(食マネジメント学部 1回生)
-取材先:校友 渡邊 里々子 氏
取材を通して渡邊さんの環境に対する熱い思いが伝わった。また、立ち上げから関わっていらっしゃったSustainable Weekへの想いや裏話、卒業しても私たちに関わってくださる渡邊さんの優しさに感動した。

The SDGs Pioneer Booklet vol.2

発行日	2020年3月7日
発行者	立命館大学 Sustainable Week 実行委員会
編者	亀石 弥都　（立命館大学　スポーツ健康科学部 3回生）
	徳田 祥吾　（立命館大学　理工学部 2回生）
	中西 愛裕美（立命館大学　食マネジメント学部 1回生）
住所	〒525-8577　滋賀県草津市野路東 1-1-1
Email	sustainableweek@gmail.com
Web	https://sustainableweek.org/

本書に掲載されている企業・団体、活動は2020年3月時点のものです。

この報告書に関するご意見・ご感想などについてはメールでお問い合わせください。

誰一人取り残さない

No one will be left behind